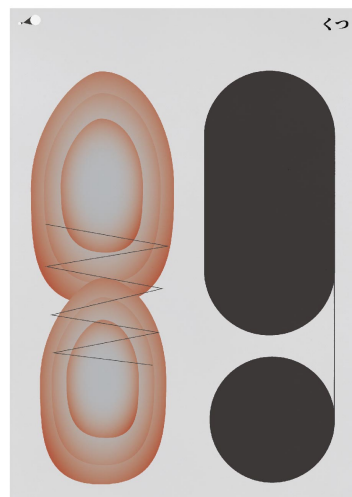
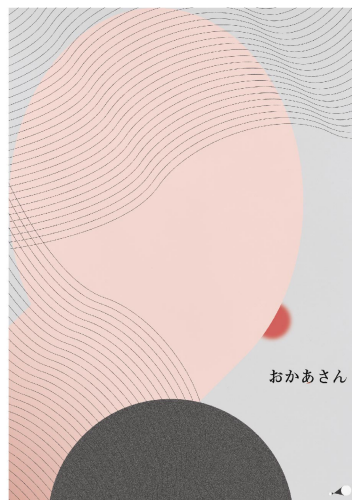
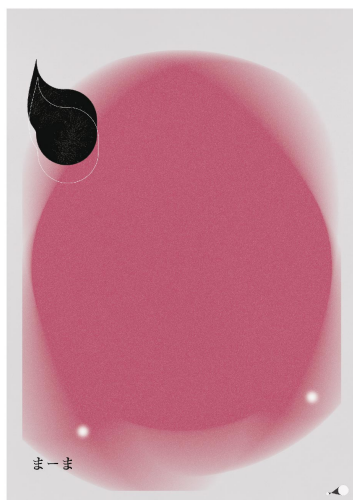


樋口 琴音
HIGUCHI Kotone



ひとつと鳴動するカタチ
紙、インクジェット印刷



ひとと鳴動するカタチ

こどもというのは、狭くもあり自由である。こどもは無知な状態で生まれる。成長過程で様々な知識や概念に触れてものを知り、自分の世界を広げていく。その概念の獲得の中で、こどもは知らないものを自分の知っているものに当てはめて理解する。自身が知る一つ一つの言葉が担う範囲が広いのである。例えば、「ブーブー」という言葉。大人であれば『ブーブー=車』と考え、定義するところを、こどもは車だけでなく、馬や電車なども指をさして『ブーブー』と言ってみたりする。自分の目の前の世界を、自分の知っているものとの共通点を見つけてそれぞれの枠組みに取り込み得ようとするのだ。自らが習得したものを辞書のようにさらって、関連づけ、新しい物事を獲得していく。そして、周りの大人たちから『馬』『電車』と新しい物事を教わり、トライ&エラーを繰り返しながら学習していく。この、「知っている」ことを用いて「知らない」ことを取り込んで得る動きを、認識の鳴動と呼ぶことにする。

大人においてもこの認識の鳴動は見られる。大人は様々な知識を得て成長しているために、こどもの時のような、がむしゃらで半ば突拍子のない認識の仕方はしない。しかし、日常の物事は見慣れある程度学習しているために、こどもの時のように劇的なものではないが、無意識なだけで確かに私たちの認識は動いている。異文化に触れたとき、知らない物事に触れたとき、大人もそれらの事象を自分の中に取り込もうとして、自身の認識を総結集するのである。そうして新しい物事を獲得していく中で認識の再構成が行われ、自分のもつ観念が変化するきっかけにもなっていく。

これらの動きは自由であり、ものの本質を捉えるもっとも柔軟で芯を捉えた現象であるとわたしは思う。自身の固定概念は自分の思考の土台となるが、ものを見る上で阻害するものにもなりうる可能性を秘めている。鳴動は、それら私たちの考えの根幹に手を入れるのだ。「知っている」ことの強みと弱みを、この認識の鳴動は揺るがし、新たな知見を私たちに与えてくれるはずである。